

1.はじめに

経済学者・社会哲学者ハイエクの多くの著作の中で、『感覚秩序』(1952年、以下SOと表記する)は、唯一の心理学的領域に関する著作である。これまでSOは、ハイエクの他の著作と比べて、取りあげられることが少なかった。例えば、クレスゲは「(SOは)…ほとんど読まれることなく時が過ぎたようである。この本の重要性を意識しているハイエク学者でさえ、それを読む義務に反する場合の方が多い¹⁾」と評している。しかしながら、特にここ10年は、SOとハイエクの社会理論との関係についての関心が高まっているという²⁾。

後期³⁾ハイエク社会理論における重要な概念は、「自生的秩序」と「進化」の「双子の概念」である⁴⁾。ハイエクは1960年以降明示的にこれらの概念を導入することで、かれの言う「設計主義」を退け、自由な社会を擁護する主張を展開した。近年指摘されてきたのは、SOと自生的秩序論との関わりである。つま

*京都大学大学院経済学研究科博士後期課程, E-mail: yusuke-y@ijk.com

¹⁾ Hayek [1994] 邦訳 246 ページ。

²⁾ De Vecchi [2003] p.135 「かれら(注:ハイエク研究者)が『感覚秩序』へ注意を払い、精神過程におけるハイエクの洞察と社会システムの形成と進化に関するかれの思想との間にある関係を検討することに注意を払うことが増えてきたのは、ほんの過去10年間である」。

日本において、SOの内容を紹介し評価した研究は、西山[1964]と上山[1989]がある。比較的早くから、SOと社会理論との関係を論じたものにグレイ[1984]や嶋津[1985]がある。グレイは以下のように述べている。「『感覚秩序』の議論の筋道を注意深く辿ることは、ハイエクの著作を適切に理解する上で、不可欠である」。また、「なんといっても決定的に重要なのは、この書で説かれている知識論は、ハイエクが経済理論や社会哲学の面で探るに至った多くの立場から推知されるものであるということだ」(Gray [1984] 邦訳 13-14 ページ)。このようにグレイは、ハイエク体系におけるSOの重要性を指摘し、経済理論や社会哲学への影響を示唆した。ただしここでグレイの考察は、これに留まるものである。

嶋津は、SOが、ハイエク体系における法理論の基礎をなすことに注目し、ハイエクの心理学は法理論の方法論的側面を表わしていると評価する。「一応は心理学として展開される理論は、二つの側面で社会と法の科学についての基本理論に関連する。一つは、社会の理論または認識の可能性とその限界を理解するという意味での社会科学のメタ理論(つまり社会の理論についての理論)という側面であり、もう一つは、社会科学の対象である社会を構成する個人についての基本的理解、または人間学としての側面である」(嶋津[1985] 43 ページ)。

最近の研究ではデ・ベッキ[2003]が、SOをハイエクの同時代の心理学や哲学の流れに位置づけた。それによれば、ハイエクがSOを書こうとした動機は、当時強い影響を与えていたマッハに対する反論に始まる。「かれ(ハイエク)は、マッハの貢献のなかで、理論の心理学と哲学的枠組みとを区別した」。そして「…哲学的レベルにおいて、ハイエクはマッハと自分自身とを区別した²⁾」(De Vecchi [2003] p.137)。

さらにデ・ベッキは、ハイエクのSOがゲシュタルト心理学から受けた影響を強調する。かれによれば、ゲシュタルト心理学特有の他人の行動を「形態」として認識することが、ハイエクが採用した他人の行動のパターン認識に影響を与えているという。「ハイエクが採用した用語はゲシュタルト学派とのそれとは異なっているけれども、かれは他人の行動の知覚を、ゲシュタルト的知覚の典型的な特徴によって表現した。かれは、ゲシュタルト学派の『形態』を認識する能力と同様の『パターン』を認識する能力が、個人に備わっているとした²⁾」(Ibid., p.154)。

コールドウェル[2004]は、ハイエクにおけるSOの意義を、同年に発表された『科学における反革命』との関わりで、以下のようにまとめている。ハイエクは、社会は単純現象ではなく複雑な現象であるから、社会科学の目的は原理説明に留まるべきである、と考えていた。「かれ(ハイエク)は、すべての科学の間で、基礎的に分かっ線は、自然か社会かにあるのではなく、単純なものとして研究されるか、複雑現象として言及されるか、にあると結論づけた²⁾」(Caldwell [2004] p.249)。コールドウェルによれば、複雑現象としての自生的秩序に関する研究の例として、SOのような心理学的研究があったのである。「SOは、いかにして複雑な自生的秩序が存在しうるかに関する例にとっても、さらなる例の発見のためのはずみにとっても、かれの後期の著作のなかで大変大きな役割を果たすようになった²⁾」(Ibid., p.240)。

³⁾ 一学者の知的な営みを、簡単に前期、後期と区切ることは難しさがつきまとう。しかしながら、本稿においてはひとまず、ハイエクの長い生涯の中で経済学に取り組んでいた時期を前期ハイエク、社会哲学に関心が移行してからを後期ハイエクと呼ぶこととする。

⁴⁾ ハイエク社会理論において「自生的秩序」と「進化」が一对である必要性については、吉野 [2005b :2006]にて検討した。

り、人間の心の中に形成される感覚秩序と、社会において形成される自生的秩序の類似性を指摘し、ハイエク体系における SO は、自生的秩序論の基礎を提供している、とするものである。

ここに、本稿の考察によって付け加えたい論点がある。SO に関するかれの知見と、かれの社会理論の方法論が、関係することは、ハイエクが SO の執筆の動機を下記のように記していることから明らかである。「理論心理学について、私の考えを体系的に検討しなおすことを迫ったのは、社会的な理論の論理的性格に関することがらである⁵」。それならば、かれの社会理論においてもひとつの重要な要素である進化的な概念を、SO の中に見て取ることはできないか。

本稿においては、上記の問題意識から出発し、ハイエクの SO における進化概念を検討する。これにより、後期ハイエクの社会理論における進化概念の萌芽が、心理学的考察にあることを確認する。かれの進化概念が、明示的に述べられる⁶前から、その念頭にあったことが確認できるだろう。もとより、心理学に関して議論する十分な知識は筆者にはない。本稿の目的は、SO がハイエク社会理論の形成過程に与えた影響を考察することにある。

手順を以下に述べる。まず 2 節に、SO の議論を整理する。次に 3 節では、SO が、ハイエクの社会理論に提供した知見について検討する。最後に 4 節において、SO のハイエク体系における位置づけを探る。ここでの考察は、従来までのハイエク解釈に新たな点を付け加えることになるだろう。

2. ハイエクの『感覚秩序』

2.1 物理的秩序と精神的秩序

「心」の解明は、研究者にとって、長きに渡って興味を引くテーマであり続けている。心とは何か、または心はどこにあるのか、という問題—ハイエクが言い換えているところの「精神—身体」問題—は、ハイエクの時代にあっても、「伝統的な問題」であり、かつ困難な問題であった⁷。ハイエクは、SO 出版後 25 年後に著した小論「25 年後の『感覚秩序』」において、自らを「心理学に関する限り、実のところ、わたしは 19 世紀から来た幽霊である」⁸と称している。そのハイエクが、あえて SO を著した動機は、この精神—身体問題に対して何らかの主張をすることにあった。

ハイエクはこの問題に関し、まず以下のように対象を絞ることから始める。「ある生理的なインパルスが、中枢神経を通り、機能的な意味で、どのようにして他のインパルスとは異なるようになるのか、つまり、われわれは感覚のさまざまな性質がそれぞれ違っていることを承知しているのであるが、同じようにインパルスが区別されるのはどのようにしてであるか⁹」。この「感覚的な質」とは、「さまざまな刺激に対するわれわれの分化した反応のあらゆる属性や次元¹⁰」を意味する。

ハイエクが考えるには、行動主義とは異なり、世界には、感覚的な秩序と物理的な秩序が存在する¹¹。前者は「主観的、感覚的、感じられる、知覚される、日常の、行動的、現象的」なものであり、後者は「客

⁵ Hayek [1952] p. v.

⁶ ハイエクの進化概念に関する叙述が見られるのは、特に『自由の条件』[1960]以降の著作である。

⁷ Hayek [1952] p.1 邦訳 9 ページ。また、近年においても心と脳との関係を探る研究はたくさんにあるにも関わらず、「脳がどのように情報を操作し処理し生成しているかという問題につながる成果、すなわち心に結びつく成果は、きわめて少ない」(櫻井[2005] p.1)。

⁸ Hayek [1982] p.287.

⁹ Hayek [1952] p.1 邦訳 10 ページ、強調は筆者。

¹⁰ *Ibid.*, p.1 邦訳 10 ページ。

¹¹ *Ibid.*, p.28 邦訳 37 ページ。「行動主義は、精神の問題を、独立または客観的に与えられる現象的な世界に対する個人の反応であるかのように扱った。しかし実は、主題を構成しているのは、物理的な世界とは異なる現象的な世界の存在である」。

観的、科学的、『地理学的』、物理的、時には『構造的』¹²なものである。ハイエクの定義に従えば、前者のような感覚によっては規則性を的確に記述することが難しいことに対して、われわれの把握を助けるのが物理学の仕事であり、逆に物理的に把握できることを、われわれの感覚に与える影響を考察するのが心理学である。「われわれが知りたいことは、物理的な状況が現象的な絵に変えられる過程がどのようなものか¹³」である。

注意すべきなのは、二つの秩序の間での対応関係である。感覚秩序における感覚的な「質」と、物理的秩序における「刺激」とは、必ずしも一対一で対応しない。同じ A という刺激から、A”や B”という別の感覚を引き起こすこともあるし、C”という感覚を引き起こすのは、常に C という刺激ではなく、D の場合もある¹⁴。この説明は、常に刺激と感覚が一対一であるとする「行動主義」的心理学とは異なる。「(行動主義は)物理的に異なる刺激が異なる受容器官に作用しながら、同じ、あるいは似た感覚の質を生み、したがって同じに扱われるという事実が無視されている」。

ここで刺激は、それが感覚に与える効果を基準として、感覚秩序内部に配置される。その配置を決める関係こそが、感覚秩序における「分類」という機能である。

2.2 神経システムの「分類」機能

ハイエクは、「分類」(classification)を、「…それぞれの刺激には秩序のなかで決まった場所が与えられ」ることであり、「その場所は、その刺激が他の刺激とさまざまな組み合わせられて生起するときに生体に対してもつ意味を表す¹⁵」と説明している。

「刺激」について心理学的に述べるため、ハイエクが採用している神経システムのメカニズムを検討しよう。分類を行う機能を持つ器官は、神経システムであり、それはニューロン細胞の集まりであると考えられている。あるインパルス（電気信号）がニューロンに発生すると、別のニューロンへとインパルスが伝えられる。ニューロンとニューロンの間を媒介しているのは、実際にはシナプスであり、インパルスを受け渡している¹⁶。

また、同じインパルス A を引き起こすインパルス B と C は、同じクラスに属する。これは、インパルスによる同じ効果 A’を引き起こすからである¹⁷。そして、同じクラスに分類されたインパルスは、結合したインパルスとみなされ、このクラスを象徴する存在となり、次に来るインパルスと関係を形成する。次に来るインパルスが共通したものであった場合は、それらとの関係は強まり、逆に異なるインパルスが来た場合は、それらの結びつきはまた違ったクラスを形容するようになるだろう¹⁸。

¹² *Ibid.*, p.4 邦訳 12 ページ。

¹³ *Ibid.*, p.7 邦訳 15 ページ。

¹⁴ *Ibid.*, p.8 邦訳 17 ページ。「それぞれの感覚に対して常に一つの特異な刺激が対応しているという仮定は、はじめから用心して避けなければならない。いくつかの違った刺激が同じ感覚を生むことができるばかりでなく、多くの場合に、というよりもおそらく原則として、いくつかの違った刺激が、さまざまな受容器官に作用して、ある特殊な感覚を生むようになっていていると思われる」。

¹⁵ *Ibid.*, p.42 邦訳 53 ページ。

¹⁶ Hayek [1952] p.55-58 邦訳 67-71。ここで述べたハイエクのニューロンの説明については、現在の知見に照らしてみても、ほぼ同様のメカニズムであると言って良い。ただしハイエクは、シナプスが媒介される際に、興奮の信号のみを伝達すると考えているが、最近の研究では、実際には興奮を抑制する信号も伝えていることが明らかになった。「シナプスには次のニューロンの活動を促すもの（興奮性）だけではなく、逆に活動させにくくするもの（抑制性）もあり、この興奮性シナプスと抑制性シナプスの組み合わせにより、バランスのとれた複雑な信号伝達が可能となっている」（櫻井 [2005] 3 ページ）。

¹⁷ *Ibid.*, p.68 邦訳 82 ページ。「同じ他のインパルスを喚起するあらゆるインパルス、あるいはインパルス群は、それらが共通の効果を持つから同じ『クラス』に属する」。

¹⁸ *Ibid.*, p.73 邦訳 88 ページ。「他のインパルス間の関係を表わすインパルスは、今度は、その次に来るものを獲得し、それによって、みずからの明確な機能的意味を得るだろう。次にくるものが共通することによって表わされる質は、

かくして、神経システムによって生じる分類は、感覚秩序の形成に貢献する。またここで重要なのは、秩序内部における個別のインパルスは、常に関係性において意味を持つことである。「さまざまなインパルス間の結合の階層的組織の結果として、われわれが出発点とした一種の『関係』（すなわち、インパルス間の因果的な結合）は、複雑な構造を作り上げることに使われ、この構造について、さまざまな要素間にある多種多様な関係をいうことが正当であるといえる¹⁹」。

2.3 「リンケージ」と「地図」の形成

先に述べたような「いくつかの求心性（注：中枢神経システムへ到達しようとする性質）のインパルスが同時に起こることによる新たな結合の形成」をハイエクは、「リンケージ」と呼んでいる²⁰。そして外的な刺激は、リンケージの働きを通じて、人間の中に取り込まれる。言わば、外的な刺激の記録が、人間の精神に刻まれる。かれは、この記録のことを、「地図」と呼んでいる²¹。

ハイエクは、刺激を中枢神経システムによって分類するという物理的な出来事が、人間知性にとつての精神的な感覚を形成するという、精神的世界と、外界の物理的世界との関係を描写している。かれはこれを、以下のように例えている。「（人間の）感覚と知性の働きは、両者とも同じように、中枢神経システムによって行われる分類にもとづいていること、また、どちらも同じ連続過程の部分であって、その同じ過程によって、脳の中の小宇宙は外的世界の大宇宙の再現に次第に近づくことを、われわれは想定している²²」。かくして、「地図」の形成は、人間がその内的な世界の中に感覚的な秩序を形成することを表わす。

感覚的な秩序は、外的なインパルスの関係を人間の神経システム上に表わすが、それはかならずしも外的な世界を直接に表わすものではない。ハイエクが感覚秩序を「不完全」なものであると称するのは、この意味においてである²³。秩序が「不完全」とみなされる原因の一つは、受容器官がインパルスを選択していることによる。受容器官は、ある刺激には敏感であるが、他の刺激には反応しないといった、選択機能を持っている。選択されて残ったインパルスだけが、リンケージを形成するのに貢献し、選択されなかったインパルスは、リンケージの性質に影響を与えない。このような選択によって、最終的にどのような外的事象が記録されるかは、生体の構造によって決まる²⁴。

このようにハイエクは、人間が外界の物理的な刺激を処理し、自らの感覚に表現するメカニズムについて述べた。外的な刺激がインパルスとなって、人間の中に入ってくる時、受容器官による選択を経て記録される。また、その記録は、そこに存在するリンケージ、すなわち前段階でのインパルスの結合との関係によって決まるから、それは時間を伴った繰り返しの過程を考えることができる。こうして、外的な物理的刺激の秩序が、人間の内的な世界の感覚的な秩序に反映されていくのである。感覚秩序は、前もって形成されたリンケージと新しいインパルスとによって絶えず修正されていく「地図」に例えることができる。ただし、どんなに秩序の形成が高度に進んでも、物理的世界を完全に反映することはない。「外的世界の

最初のインパルス自体よりも、その間の関係に結びつくであろう」。

¹⁹ *Ibid.*, p.73 邦訳 88 ページ。

²⁰ *Ibid.*, p.104 邦訳 122 ページ。

²¹ *Ibid.*, p.109 邦訳 128 ページ。「…形成されるであろう結合のネットワークのなかでの関係や、それが再現しているといつてよい外的事象の構造を議論するにあたっては、ときには地図のような直接の比喻を使って、ある部分の物理的世界に存在する関係を再現する」。

²² *Ibid.*, p.107 邦訳 126 ページ。

²³ *Ibid.*, p.108 邦訳 126 ページ。「リンケージが中枢神経システムのうちに作り上げる秩序は、対応する物理的な刺激の間に存在する関係の再現としては、きわめて不完全であるばかりでなく、ある点では明らかに誤りでさえあることがある」。

²⁴ *Ibid.*, p.73 邦訳 88 ページ。「受容器官は、…ある種の外的刺激にのみ敏感で、他の刺激には敏感でない。…最後にどのような外的事象が記録されるか、それがどのように記録されるのかということは、進化の過程で形成されている生体の構造に依存する」。

さまざまな事象の間の関係の『地図』は、高次の神経中枢においてリンケージが次第に作っていくもので、きわめて不完全な地図であるばかりでなく、次第に変化するような地図でもある。それは、外的世界に存在する関係の一部を表わし、加えて、客観的に存在するものとは異なるものを表わす²⁵。

3. 『感覚秩序』にみる進化概念

ハイエクは SO において、進化(evolution)という言葉を使用している²⁶。しかしながら、ここでの使用は、生物の進化を説明するのに用いているだけであって、自らの理論を形容したものではない。本節において、ハイエクが SO で展開する理論に見られる、進化概念について吟味しよう²⁷。ここで、「進化的」であることを示すために、以下のことを確認する。第一に、ハイエクの感覚秩序論が、変異・選択・遺伝によって特徴づけられること、第二に、時間的な累積過程を伴っていること²⁸、第三に、その感覚秩序の形成が、全体として発展する方向に関して意図を持たない、つまり無目的なであること。

最初に、第一の点に関して、進化の三つの特徴、変異・選択・遺伝について順に確認しよう。神経細胞の受け取る外部刺激は無数に存在する。それゆえ内的な神経システムにおけるインパルスは、常にバリエーションが生まれている、多様な存在であると言える(変異)。インパルス群は、受容器官によって選択され、敏感な反応があるものは本来存在するリンケージと結合する。結果的にインパルスは、感覚秩序の形成に貢献するものが残され、そうでないものが淘汰される(選択)²⁹。経験的に前もって形成されたリンケージには、それまでのインパルスに対する知覚が蓄積しており、新しいインパルスと組み合わせさせて、別のインパルスを形成することで、これまでの知覚を次へと伝達している(遺伝)。

次に第二の点に関して述べる。形成されたリンケージが、時間的に後から来たインパルスとの関係で、新たな感覚を形成する。そしてそれによって形成された感覚秩序全体は、刻一刻と変化する。このようなハイエクの説明は、時間的経過を考慮したものである。上記のような刺激の処理システムは、動学的な説明であって、静学的に記述できるものではない。また、「前感覚的経験」を元にして感覚の形成が可能であり、新たなインパルスと共に、また新たなインパルスが形成されていくから、それは累積的な過程である。

最後に第三の点に関して、感覚秩序と自生的秩序とのアナロジーを考える³⁰。自生的秩序内部において諸個人は、全体のことや他人への影響をすべて考慮して行動することはできない。諸個人の知識が行き届くのは、自らの行動と、せいぜい身の回りの範囲だけである。諸個人が可能なのは、行為の繰り返しとし

²⁵ *Ibid.*, p.110 邦訳 128 ページ。

²⁶ *Ibid.*, p.83 邦訳 99 ページ

²⁷ ハイエクは、「…個体の遺伝的選択反応の過程は、特有の適応を示すのであるが、その過程とは区別されるのが『学習』である」(*Ibid.*, p.82 邦訳 97 ページ)と述べている。ここで「分類」の対象は、意識的な刺激だけでなく、無意識によるものも含むため、それをもとにした感覚秩序の「進化」も、無意識的なものを含んだ進化であると考えられる。「感覚的な質による分類も、また意識的な経験に限らない。われわれは、自分も他人も、おおよそ意識的な行為をするのと同じ原則に従って、無意識の反応のなかで刺激を分類している」(*Ibid.*, p.23 邦訳 33 ページ)。それゆえ、「動物が経験に基づき、最適な行動を選択する意思決定の過程」(岩波生物学辞典, p.205)である「学習」は、「進化」とは区別して考える。

²⁸ 岩波生物学辞典(第四版)によれば、進化は「生物個体あるいは生物集団の伝達的性質の累積的变化」(p.676)と定義されている。

²⁹ ここでは形成された結合が、個体発生によるものか、系統発生によるものかが曖昧であるが、ハイエクはこれを区別しないで考えている。「この神経システムの階層的秩序に多少結びついて、問題の過程の系統発生的側面と個体発生的側面との間、あるいは遺伝する結合と個体が獲得した結合との間には区別がある。しかし、われわれの知識の現状では、この問題について多くをいうことはできない」(Hayek [1952] p.81 邦訳 96 ページ)。このことについて嶋津[1985]は、「…個体にとって生来的なものと後天的なものの境界をどこに求めるべきかという専門家の間での現在まで続く激しい論争に巻き込まれず、また当時の知識の限界から来るこの点での明白な誤りを避けることを可能にする」(25 ページ)ためであるとしている。

³⁰ ハイエクの自生的秩序論については、吉野[2005a]を参照されたい。

て存在するルールに従って行動することだけであって、全体としての秩序を形成しようとして行動するわけではない。またそれはハイエクの知識論から言えばそもそも不可能である。ただし、部分的な諸個人の行動が、全体として意図せざる秩序の発生につながっている。自生的秩序は、言わば状態を記述する用語であるため、それ自体ではある具体的な目的を持ったものではない。

感覚秩序についても、同様のことが言える。インパルスとそれを選択する受容器官は、部分的に自らの機能に従っているだけであり、全体としての感覚秩序の形成に直接貢献できるわけではない。また、感覚秩序はそもそも、無意識の範囲を含むから、例えば人間が合理的にある感覚秩序を設計することは、不可能である。部分的なインパルスに対する反応が、全体としてみれば、意図せずして感覚秩序を形成することにつながっている。また感覚秩序自体が、ある目的や方向をもっているわけではない。

4. 結語

SO における感覚秩序は、これまでハイエク研究者に指摘されてきたように、自生的秩序と相似的な関係にあるだけでない。上記に示したように、進化的な概念を見て取ることができる。それゆえ、ハイエクが自覚的であったかそうでなかったかに関わらず、後のかれの社会理論における重要な概念、「自生的秩序」と「進化」の「双子の概念」の双方が、アイデアとして SO に現われていると言えよう。

ハイエクが進化論の摂取した過程については、スコットランド啓蒙の社会哲学、メンガー、在英時の当時の文化的進化論の影響が指摘可能である³¹。さらに本稿で得られた知見を考慮すれば、ハイエクは SO の執筆を通じて、自らの理論に進化的概念を反映させていったのではないか。そしてここでの試みが、やがて進化論について直接言及し、それを社会理論に適用した「行為に関するルールの体系の進化についての覚え書き」(1967 年)や「法と立法と自由」(1973,76,79)につながっていったと考えられよう。それゆえ SO は、独立した著作ではなく、ハイエクの方法論的基礎を提供している点で、かれの社会理論と密接な関係にあることが再確認できる。

本稿における関心は、ハイエクの心理学的著作が、かれの社会理論にどう影響したかに関する検討である。そのため、SO を執筆したそもそもの動機である「精神-身体問題」に関するハイエクの回答についての考察が不十分である。この問題は、SO で述べられているハイエクの方法論的立場と関係する。これには、同年に出版された方法論に関する論文集『科学における反革命』との比較が必要である。さらに、現代の認識論、認知心理学の成果も考慮せねばならない。これらに関する考察は、別稿に譲る。

最後に、ハイエクの知的営為を、現在のわれわれがどのように評価するかについて述べたい。江頭[1999]は、ハイエクの理論経済学の成果を吟味することで、かれの活動を、均衡の経済学からの離反、もしくは均衡から非均衡の経済学への移行の試みと評価した。コールドウェル[2004]は、ハイエクの方法論の検討から、以下のような含意を導いた。社会は、単純現象ではなく、複雑現象なのであるから、それを説明する社会理論もまた、複雑現象を説明する理論でなくてはならない。そのためにハイエクが重視したのは、社会理論の役割を「原理説明」と「パターン認識」に限ることである。

本稿の考察で得た知見をもとにすれば、以下のことが提出できる。それは、「主知主義」から反「主知主義」への、われわれの意識の転回である。いくら科学が進んでも、人間は、すべてを自らの知識にすることはできない。言葉では語り得ない領域、知識として完全には知り得ない領域が存在する。これは、人間理性に対する謙遜の態度を重視することであり、時空を超えたハイエクからのメッセージである。

(以上)

＜参考文献リストは、当日配布のものをご覧ください。web 公開版をご覧ください。＞

³¹ ハイエク進化論の起源については、吉野[2005b]を参照されたい。